

Title	18世紀初頭の女性論 : M <sup>me</sup> de Lambertの場合
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	大阪外国語大学学報. 18 p.97-p.108
Issue Date	1968-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80300">https://hdl.handle.net/11094/80300</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 18世紀初頭の女性論

—— M<sup>me</sup> de Lambert の場合 ——

赤 木 富 美 子

## Le Féminisme au début du XVIII<sup>e</sup> siècle

—— Madame de Lambert ——

Fumiko AKAGI

Dans notre recherche sur la condition sociale des femmes aux XVII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles, Madame de Lambert attire notre attention pour la raison suivante.

Ame du célèbre salon strict du mardi et du mercredi, et “ardente élève” de Fénelon, elle ne s’est jamais révoltée contre la morale traditionnelle chrétienne, au contraire elle s’est approprié ce que le XVII<sup>e</sup> siècle avait laissé de meilleur. Mais en même temps, elle avait, comme habitués de son salon, Fontenelle, La Motte, Montesquieu, Marivaux et représentait une tendance nouvelle dominant l’opinion pendant 30 ans au début du XVIII<sup>e</sup> siècle.

Ainsi placée entre les deux siècles très différents à bien des égards, elle devait penser sérieusement à la destinée des femmes et à leur bonheur avec un esprit modéré mais délivré de préjugés.

Nous avons tâché dans cet essai de dégager ses idées sur la condition sociale des femmes, leur éducation et leur capacité intellectuelle.

Dans le chapitre premier, nous avons comparé son *Avis d'une mère à sa fille* avec *De l'Education des Filles* de Fénelon et constaté que celui-ci insistant sur le péché originel et sur la faiblesse de l’esprit et du corps féminins, ne permettait aux femmes que d’occuper la maison, tandis que Madame de Lambert ne déniait pas le rôle des femmes dans le “monde” et avait toujours confiance dans la nature et la raison des femmes.

Dans le chapitre II, nous avons affirmé ces idées de Madame de Lambert dans ses autres oeuvres, *Traité de la Vieillesse*, *Traité de l'Amitié* etc. Nous avons aussi constaté qu’elle croyait assez à une certaine égalité des deux sexes pour admettre la possibilité

de l'amitié entre les deux sexes.

Dans le chapitre III, nous avons étudié dans sa *Réflexion sur les femmes* ses idées sur la vie intellectuelle des femmes et constaté que grâce à sa confiance dans la raison et la sensibilité de la femme, elle trouvait la femme capable de toutes sortes d'études malgré la grande contrainte que la société y avait opposée.

前号で見たように、17世紀末に書かれた Fénelon や M<sup>me</sup> de Maintenon などの女子教育論は、すべて、女性が男性より劣ったものとしてつくられたというキリスト教の伝統と、それゆえ女性の使命は家庭をまもることであるという二大原則をその基本としていた。<sup>(1)</sup>

しかし一方、現実の社会では、1660年くらい女性の知的欲求がたかまり、サロンに学者を招いて科学書を繙くもの、解剖の講義に集まる婦人達など、その数は急激に増して行ったらしいことを、われわれは諷刺文学を通じて確認した。1673年には、Poulain de la Barre が両性の平等を説いた書が残っており、また実際こうした論議はその後学者の間で活潑に行なわれたらしい。教会と世俗の間でこの相反する考え方は、どのように発展し、変化して18世紀に至るのだろうか。今回はその一つの過程として、M<sup>me</sup> de Lambert の *Avis d'une mère à sa fille* 「娘に与える母の意見」(初版1728年、執筆推定17世紀末)を中心に、彼女の考え方を検討してみたい。

相反する二つの考え方の接点として、この夫人を取上げる意味は、彼女が先ず Fénelon の《ardente élève》<sup>(2)</sup>と公認されていることである。それにもかかわらず彼女は、火曜と水曜に開かれた Nevers 館のサロンの女主人として、《one of the most remarkable personages of the early eighteenth century》であった。<sup>(3)</sup> このサロンには Fontenelle もたえず姿を現わし、指導的役割を果たしていたし、Marivaux, La Motte の他、Montesquieu も出入りして、この女性との親交を誇っている<sup>(4)</sup>。M<sup>me</sup> de Lambert の数少ない研究者の一人である J. P. Zimmermann は、この女性の影響が Montesquieu の「法の精神」のいくつかに見られること、また Rousseau にもその思想のかすかな痕跡を認められることをあげて高く評価し、「30年間にわたって M<sup>me</sup> de Lambert のサロンが世論を支配し、近代派と女性の味方を勝たせたのは、火曜の夕べの真面目な会話、作品読講と討論による<sup>(5)</sup>」とのべている。それ故、彼女をとりあげることは、18世紀初頭のある知的グループの一般的な考え方をそこに考察し、17世紀の伝統を引き継ぎながら、18世紀のすぐれた人々に影響を与えた一つの流れを追求することに他ならない。

社交界の中心として生活し、広い読書でその経験を広げながら、彼女は旧来の女性観をどのように受けとめ、批判しているであろうか。当然の方法として、進んだ女子教育論者ではあるが、教会の伝統に忠実な Fénelon との比較によって、その検討を始めることにする。

∴

「娘に与える母の意見」を Fénelon の「女子教育論」と比べてみて、最初に目を射るのはその類似である。Fénelon は、女子の教育がどんなになおざりにされているかを、男子に対する世間の配慮と対比して概歎し、その重要性を説いた数少ない教育者の一人である。M<sup>me</sup> de Lambert も、女性が「人間の半分を構成していること」<sup>(6)</sup>は考えられたこともなく、「まるで別な種族」<sup>(6)</sup>をなしているように見棄てられていると烈しい怒りを示しているほか、この書には Fénelon の大きな影響が各所に見出され、Fénelon の文章をほとんどそのまま写したところさえある。

しかし、その類似点にも拘らず、なお存在する相違にここでは着目してゆきたい。というのは、如何にも夫人は Fénelon の追隨者であり、また Fénelon がこのサロンを「遠くから激励した」ことも事実であるが、この母から娘への意見は、女子教育論の全くのひき写しではない。それは決して反対意見をのべたものではないが、Fénelon の一つ一つの教えを体験の裏付けで説得しようとする時、当時の monde を支配していたにちがいない別な考え方が、その背景に姿を現わすのが感じられるのである。そこには女性が女性自身に対して与えようとした生活の理念が見られるのであり、すでに18世紀の輝かしい知性を集めたサロンの女主人としての考え方が、かいまみられるからである。こういった観点から見て、最も根本的な相違は、宗教の占める地位のちがいにありと思われる。Fénelon の教育論の目的全体が、女の子を愚劣な乳母にまかせて迷信におちらせることなく、一方世の軽薄な風潮にも染めずに、どうして快く、たのしく道徳を教えこむか、にあると云ってよい。その教育の基礎をなしているのは、全篇神の教えであるし、また特に宗教教育に限ってみても、それに与えられた部分は、13章中、6、7、8の3章にわたっている。

M<sup>me</sup> de Lambert も、常に宗教の重要さを忘れてはいない。世間に出る娘に対して彼女は熱心によびかけている。「貴女を待っているものに対して、どんなに武装してもしすぎることはないでしょう。すっかり宗教を持ってそこへいらっしゃい。」<sup>(p.53)</sup>しかし Fénelon の教育論で宗教がすべての考の発想の元にあることと比べると、ここでの宗教の占める位置は著しく減少させられているように思われる。なるほど彼女は宗教がすべての徳の源になると云ってはいる。<sup>(p.52)</sup>しかしそれはせいぜい心の平和を得、苦しみに対処するための避難所にすぎない。「貴女の宗教のマントで身をくるみなさい。若い時の弱さに対してそれは大きな救いになってくれ、更に年がいったからは、たしかな避難所になってくれます。」<sup>(p.53)</sup>ここでは Fénelon が長々と教えた来世の救いは問題になっていないのである。さらに、「自分の外には、たしかな幸福も、ながく続く幸福もないということを考えなさい。」<sup>(p.54)</sup>とストア派のように説いている箇所も、「古代ギリシャ・ローマ人も云いました。私は自分の友であることを学んだ、だから私は決して孤独ではないでしょう」と<sup>(p.79)</sup>と教えている箇所も、彼女の宗教が少くとも非常に現世的であることを証明するであろう。

さてこうしてキリスト教に与える重要さの程度の違いから、いろいろの他の部分の教えの相違が由来している。まず、カトリックの教えを基礎とする限り、女性はアダムの骨からつくられ

た、弱くて悪に満ちた性であるという観念は動かせないものであり、教会が神に仕えるごとく、夫に従属すべきものであることは第一の原理となる。Fénelon は教育論の第二頁でそれを明言している。「女性達は肉体も精神も男性のそれより弱く虚弱である。」<sup>(7)</sup>そこで女性の使命も、「国を統治したり、戦争をしたり宗教の儀を司ったりするのではなく」<sup>(p.4)</sup>、「家の中で静かに仕事をすること」<sup>(p.4)</sup>にある。家の中の仕事とは子供を躾け、夫を幸福にし、召使を取締まることで、大変重要であると云ってはいるが、しかし区別は厳然とつけられているのである。M<sup>me</sup> de Lambert はこれを神による区別と信じていたであろうか？はなはだ疑わしい。「娘に与える母の意見」には、Fénelon の言葉を要約したような定義が最初<sup>(8)</sup>にあるが、それ以外夫に対する心遣いといった箇所はどこにも見当たらない。これは当時の社交界の風潮としては当然のことであるが、<sup>(9)</sup>Fénelon の弟子としては奇異なことである。また「社交界の快楽は、見せかけにすぎない。」<sup>(p.54)</sup>と戒めているが、それはあくまでそこに生きるための心得であって、この書の中、<sup>1</sup>が社交生活の巧みさ《habileté》<sup>p.90</sup>の教えである。「これらの善意ある、高邁な行為をしばしば繰返していると、遂には大きな立派な名声を得ることが出来るのです。」<sup>(p.91)</sup>他の人の値打を下げることによって名声を得るのではなく、「あなたの名声を、あなたの徳の上におくようになさい。」<sup>(p.91)</sup>このような名声と、キリスト教の教えるつましい女性の役割とは相容れるものであろうか。Fénelon に見られるような宗教に裏付けられた区別、女性の仕事が家の中のみあるというはっきりした使命感は、その書の全体を通じて見出すことが出来ない。むしろ M<sup>me</sup> de Lambert は、女性のおかれた地位を束縛と感じながらも受入れて、不満に耐えて、その中で何とか幸福になる道を考え出そうとしているように見える。「女性の徳は困難なものである」<sup>(p.59)</sup>と彼女は云っている。「何故なら徳を行うように栄光が助け てはくれないから。」<sup>(p.59)</sup>「自分と自分の家庭だけを規制し、単純で正しく謙虚であること、辛い徳である。何故なら目立たない徳だから。」<sup>(p.59)</sup>そしてそれでも、「人に気に入りたいというこの過度の希いを克服なさるように。少くともそれを見せてはいけません」<sup>(p.64)</sup>と訓している。

更に Fénelon とこの「熱心な弟子」<sup>(註2参照)</sup>とを分つ一番大きな点は、「気に入ること」、plaire についての意見の相違であろう。有名なサロンの女主人として、彼女が、家庭内にかくれ住むことが女性の使命であると考えなかったのは当然であるが、plaire についての意見は、なおもっと深い思想の相違から由来しているように思われる。Fénelon にとって女性は何よりもアダムを墮落させたエヴァの子孫である。女性は罪の根源であり、出来るだけ世間から隔離し、また女性自身もその罪深い性をよく自覚してつましく暮すべきである。「女子教育論」は高らかにこのことを定義している。「人間は罪による墮落の中に生れる。伝染する病によってつくられたその肉体は魂に対する誘惑のつきざる泉である。イエスは我々の徳を、恐れと、自分自身に対する不信におくようにと教えたもうている。」<sup>(p.87)</sup>その誘惑を目的とするとは、何という罪であろうか。「この気に入りたいという盲目的な欲望はキリストの魂に叶うものだろうか。…気に入る工夫をする時、人は何を望んでいるのか、男性の情念をかき立てようとしているのではないのか。あなた方

は、微妙な死に至るような毒を用意しているのだ。そしてあなた方はそれをすべての見物人の上に流すのだ。そうしておいて自分には罪がないと思っておられる！」<sup>(p.87)</sup> これは胸を露わにする当時の流行についての言葉であるが、こうした Fénelon の思考の根底をなすものは、原罪の観念であり、人間の本性への不信である。そこから由来した特に強い女性不信は、17世紀の教育論や道徳観の共通の地盤であることに注目しておきたい。M<sup>me</sup> de Lambert が、同じく「気に入ること。」について書いているところを見ると相違は歴然となる。「才能も装いもなおざりにしてはいけません。何故なら女性は気に入ることに運命づけられているからです。」<sup>(p.62)</sup> そこで「人に気に入るためには人間の心を知らねばなりません。…社交界の男の人に気に入るのは長所よりも欠点によっての方が多いのです。…彼等は徳高い人に讃めるよう強制されるよりも、あまり尊敬出来ない人と面白く遊ぶ方を好みます」<sup>(p.63)</sup> と淡々と語り、しかし、「美の支配程短いものではなく、美しいだけの女の残りの生涯程淋しいものではありません。…もし人が、美の力で貴女に執着し始めたら、すべてを友情へ持ってゆきなさい。そして相手の人が、貴女の値打でそこに引きとめられるようにしなさい」<sup>(p.62)</sup> と伝授している。賢明な教えである。しかし根本の発想において、何と Fénelon と異っていることであろう。ここでは原罪の観念は著しくよわまり、女性の人格の信頼が強く浮かび上っている。「貴女が少し社交界に出入りしたら、自分の義務の中に身を保つのに法律に脅かされる必要はないとお解りでしょう。放縦の例や、そんな人達のすぐ後をおそって来る不幸は、どんなに逸る心の動きをも引きとめるのに充分でしょう。」<sup>(p.57)</sup>

こうして女性の本性を信頼し、女性の理性の力に対する自信に裏づけられたこの書物は、多くの影響を受けたと云われながらも、Fénelon とは、思考の根底において全く異なるものである。この教育の基礎になっている考えには、革命的とも云うべき変化が見られると断言していいのではなかろうか。

女性の知的教育という点になると、この相違はいよいよ鮮かな姿を現わしてくる。Fénelon は男女の仕事が異なることを強調して、「その仕事に関してだけ学ぶように限らねばならぬ」<sup>(p.89)</sup> と云って、子供の躾と家庭の取締り、収益決算など実地的なことに限っている。*Avis à une dame de qualité sur l'éducation de sa fille*, 「子女教育について、貴族の女性に与える意見。」の中では、それ以上の好奇心のある女性を非難して、「女性は普通、身体を飾るより以上に精神を飾ることに情熱をもやすものである…彼女等は自分の知識を少しはかくすが半分しかかくさない。謙虚の誉と、才媛の誉とを併せ持つためである」<sup>(p.122)</sup> と云い、こういう「真面目な洗練された」<sup>(p.122)</sup> 虚栄心の方が、着飾ったり化粧したりする虚栄心よりも怖るべきもののだとして、「女性が恩寵について神学者の論争を学ぶよりも、家令の持ってくる計算書でも学ぶ方がずっと好ましい」<sup>(p.122)</sup> とまで云っている。彼は決して女性を無知におけというのではないが、「女性は普通、生半可にしか何も知ることが出来ない」<sup>(p.121)</sup> という意見で、役にも立たぬ知的興味を満足させるよりは、「御家で役に立つ上、社交界の危険な交際なしにすませる習慣をつける壁掛の仕事でも、令嬢に忙しくやらせなさい」<sup>(p.122-3)</sup> とすすめている。

これに対して、M<sup>me</sup> de Lambert の考える知的教育は、女性が自分自身のために行なうものである。年を取ると、「貴女は、もうあの凡ての上に及ぶ誘惑的な魅力を自分の中に持たなくなります。自分の味方として、もはや真理と理性しか持っていないのです。そしてこれはふつう社交界を支配するものではありません。」<sup>(p.69)</sup> とうしてごまかしのきかない自分と向い合うためのものが彼女のいう *étude* なのである。「ですから自分を恐れ、自分自身を尊敬することを学びなさい。貴女の *délicatesse* が貴女自身の検察官であるように。」<sup>(p.70)</sup> この女性自身に対する信頼から、Fénelon と反対に彼女は好奇心を咎めない。「貴女の中の好奇心の感情を消してはなりません。ただそれを正しく導きよい対象を与えねばならないのです。」<sup>(p.72)</sup> その対象として彼女は控え目にはあるが Descartes 哲学の勉強をもすすめている。「その能力がある時には、少しは哲学も咎めたくないと思います。特に新哲学<sup>(10)</sup>は。それは貴女の精神に明晰さをおき、観念を明確にし、正しく考えることを教えてくれます。」<sup>(p.73)</sup> 更に彼女ははっきりと次の様にも述べている。「私は若い人が素直さを持って、自分を余り信用しないのは必要だと思いますが、その素直さを余り遠く押し進めるには及びません。宗教については、権威に従わなければなりません、他のことすべてについては、理性と明証の権威だけしか受け入れてはならないのです。」<sup>(p.76)</sup> ここには女性の本性の罪への恐れなどは全く見られず、むしろ自信を持つことをのぞんでいるといえる。

以上の比較で明らかなように、Fénelon の教育は女性を弱者と見、その本性を罪の根源と見なして、それをどうして社会に有利なように導くかにあったのに対して、M<sup>me</sup> de Lambert は、女性の理性の力と、徳をえらぶ力を信頼して、女性自身のためにどうすれば幸福になるかを追求しているのだということが出来る。

∴

前章で見たように、女性蔑視の最大の源である宗教的罪惡観から解放されていたことが、M<sup>me</sup> de Lambert の「娘に与える母の意見」を特徴づける性格であるが、それでは彼女が女性を男性と同等であると思っていたかということそうではない。その差異をまず社会的現実として受入れている。そこで彼女が女性というものをどのように位置づけ、その中で向上出来るどんな希望があると考えていたかを更に詳しく検討してゆきたい。

自分の娘に語りかけるという形式で老後の心得を説いた *Traité de la Vieillesse* 「老年論」の冒頭で彼女は、女性には何一つ生きるための救いとなるような助言がなされなかったと述べている。「男性には、理性を完全にし、人生のあらゆる時に際して幸福であるための大きな知識を与えるに必要な凡ての援助が与えられている。」<sup>(p.133)</sup> これに反して「女性はそのあらゆる年代において自分の勝手に捨ておかれている。若い時は教育がなおざりにされているため、虚栄に満ちてうかうかと日をすごし、次の年令では老年のための支えも補佐も与えられないので、老年時代の女性は弱く、見捨てられてすごすのである。」<sup>(p.133)</sup> 彼女はついで両性に共通な老年の不幸もある

が女性だけの不幸もあると云っている。老年論全体を通じて説明されている不幸は、女性の社会でのあり方そのものに根ざしていると思われるので、ここにまとめてみたい。

彼女は老年の女性の生活が男性よりも辛いものになる何より大きな原因は、女性の価値がすべて外側の美しさにあることだと着目している。このような女性の捉え方は、M<sup>me</sup> de Lambert の著書の至るところに見られるものである。「娘に与える母の意見」でも、「女性は気に入るように運命づけられている」<sup>(p.62)</sup> という言葉があったが、「老年論」には、芝居見物や人中に出ることを禁じて、「美しくない顔をそこに現わす程品の悪いことはない。これらの場所を飾ることがもはや出来なくなるや否や、その場所を見すてなければなりません」<sup>(p.141)</sup> というきびしい戒めをのべている。しかしこのように外側の美しさだけで存在が許されるのは冷酷な運命である。何故なら「貴女が美しさという利点を持っていない時には、人は貴女を厳しく判断するでしょう」<sup>(p.62)</sup> し、またいつも外側に気をとられて、「大部分の女性達は自分自身に注意せず、自分自身について反省することなく生きる」<sup>(p.133)</sup> からである。「若い時、私達は他人の観念の中に生きることばかり考えている。評判を打ちたてねばならず、他人の想像力の中で名誉ある地位を自分に与えなければならず、他人の観念の中で幸福であることさえ必要なのです。私達の幸福は少しも現実ではない。私達が鑑定を乞うのは私達にではなくて、他人になのです」<sup>(p.150)</sup>

こうして自分自身でなく、他人の目という幻の中に生きることの不幸の他に、美というものの支配が実に短いという不幸がある。「時は外側の美しさを破壊し、女性達は全くたよるものがなくなるのです」<sup>(p.134)</sup>

女性の社会における位置をこのように確認した上で、彼女は、それゆえ幸福に一生を終えるにはまず自分自身であることだとくり返し述べている。先の「娘に与える母の意見」にも、「最大の知慧は、自分自身であることを学ぶにある」<sup>(p.79)</sup> と教えているが、「老年論」では、老年の意義を、「私達は自分に返って来る。この帰還にはまたその甘美さがある。私達は自分の鑑定をたずね、自分の云うことを信じはじめる」<sup>(p.150)</sup> とのべて、老年からひき出すべき利益を強調している。「私達が理性に従い始めた時、私達は生きはじめるのです」<sup>(p.151)</sup> 「幸福な生活とは、快く感じたり、想像したりすることにあります」<sup>(p.120)</sup> 「その上、古人も云っています。自分自身といふことの出来るのを学ぶのこそ、よく出来た精神の印である、と」<sup>(p.117)</sup> 外から他人の目で規定された生活でなく、理性に従って自分自身の感じを信頼して生きること、そこに彼女が女性のために求めた幸福があったのである。このようにして内心の自由、自分自身であること、を確定して女性の第一の不幸、他人の目の中に生きることから逃れるとしても、しかしそれだから世間から陰遁して生活せよというのではない。幼時から、「心の最初の動きは他の心に結びつこうとするもので」、「人は自分自身に送り返されると空虚を感じるものであり、そのうつろさは友情だけが埋めることなのだ」<sup>(p.109)</sup> と彼女ははっきり陰遁や隔離を拒否している。そこで、M<sup>me</sup> de Lambert の幸福追求の手段は、自分を確立した後短い美の支配という第二の不幸の中で、どうして他人とのつながりを保つかという点に向けられる。



美の支配の短かさが女性の不幸の原因の一つなのであるから、最初に恋愛への警戒があらわれる。「情念の囚となることは、魂が減少し弱まることである」<sup>(p.150)</sup> という点からも、「理性的な人間は恋愛を自分に拒むものである。女性は義務に対する執着から、男性はつまらぬ選択をする怖れから」<sup>(p.109)</sup> といった社会的配慮からも好ましくないものとして斥け、人と人とのつながりをもっと長く続く友情の上にたてようとしている。だから M<sup>me</sup> de Lambert の *Traité de l'amitié* に見られる友情への高い評価は、女性の位置から来る不幸の解決策として大きな意味を持っている。友情によって女性は一時的な情念の対象としてでなく、自分自身の価値によって尊敬され、長く続く愛によって孤独から救われるわけである。これはすでに 17 世紀前半、Précieuses 達の考え出したことであるが、M<sup>me</sup> de Lambert が友情の可能な条件としてあげている事柄には、その女性観の一端を示すものが多い。先ず彼女のいう友情とは、「運命も財産も信用も心配も奉仕も互に分ち合い、名誉をのぞいてはすべてが相手のものとなる」<sup>(p.112)</sup> という性質のものである。これは精神として捉えられた人間の間の完全な愛である。事実、M<sup>me</sup> de Lambert は、「美の収益は恋愛であり、徳高い恋愛の報いは友情である」<sup>(p.159)</sup> とも、「私達をそこへ導くのは普通の愛でなく純化された愛である」<sup>(p.115)</sup> とも云っている。何よりもまず肉体的条件を離れた精神としての女性を根底におかなければならなかったのは注目に価しよう。ところで精神の働きのにもいろいろあるが、M<sup>me</sup> de Lambert の考えている友情に価する精神は非常に広いいみで様々な能力を持っているなければならない。それは「常に清純な常にむらのない理性の喜び。」であるが、「趣味がまじらなければわれわれを魅きよせる力はない」<sup>(p.115)</sup> し、「もし心が感動させられなければ、早くも遠くへもゆけない」<sup>(p.115)</sup> のである。その上この友情に更に堅固な基礎を与えなければならぬ。「価値の認識によって与えられた尊敬は変ることがない」<sup>(p.120)</sup> ので、「友情はその人個人の価値にだけ結びつくものなのである。何故なら自分の中に愛される理由を持っている者だけが、愛されるにふさわしいからである」<sup>(p.120)</sup> そこで「友情は尊敬すべき人物の間にしか保たれることがない」<sup>(p.113)</sup> ということになる。すぐれた人、価値ある人というエリート意識はまた後に検討の余地があるが、この難しい友情が、男女の間に可能であるとされている点は重要であろう。それまでに M<sup>me</sup> de Lambert の引いた例は、Montaigne や Sénèque など、すべて男性同志の友情であったが、友情論の最後に至って彼女は「友情が異性の間に存在し得るかどうかが問題になっている」<sup>(p.127)</sup> といって、その答として、それは稀であるし難しいが最もすばらしい友情であるとし、「男性にと同じ価値を女性にも認める時」<sup>(p.128)</sup> にのみ可能であるという条件をあげている。

最後に、M<sup>me</sup> de Lambert が、肉体的条件をはなれては、女性は男性と同じであると云ってはいることをつけ加えておかねばならぬ。「男性は精神に語りかけ、女性は心に語りかける」<sup>(p.129)</sup> とはっきり区別し、「自然は異なる性の人々の間に、目に見えぬつながりと、結びつきをおいたので、凡てがこの友情のために準備されているのが見られる」<sup>(p.129)</sup> といい、自然の業はいつも、より完全であるのでこのような友情は自然の業であると感じられると結んでいる。<sup>(p.129)</sup> この自然への信頼と、男性と女性の精神のあり方の区別は、後に述べる女性の知的領域の問題での彼女の立論

の基礎をなすものなので、ここにもう一度明らかにしておく。

∴

以上のように、教会の教える本質的劣性論からは解放されながらも、女性のおかれた社会的な位置の確かな認識に基いて、その中での幸福を追求した M<sup>me</sup> de Lambert が、女性の知的領域における可能性についてどう考えていたかは興味ある問題である。われわれは、*Réflexion nouvelle sur les femmes* の中にそれを見出すことが出来ると考えるが、またここには同時代の或人々に共通な考え方の代表としての意見が現われているように思われる。それは Ponlain de la Barre のような真向からの男女平等論ではないが、それだけ—そう多くの人に受入れられたに相違ない巧みな論法で、彼女は女性の知的活動を擁護している。

まず前章で見たように、精神の分野を重視する一方、彼女が外的な力の支配を軽蔑していたという事実をあげておく必要があるだろう。現代ほど女性が放縦であったことはなかったという非難に対して、M<sup>me</sup> de Lambert は、人心はどの世紀でも同じであり、「習慣は外的なことにしか権利を持たないのであって、感情の上におよばず、本性をなおすことは出来ず、心の欲求を取去ることは出来ない。そして情念はいつも同じなのである」<sup>(p.175)</sup> と、習慣にしかすぎぬ価値を否定している。同じ考えから、外的な力で女性を束縛しようとする方法を軽蔑し、スペインやイタリアでは、「女性は閉ぢこめられているので、男性達は外的な障害を征服することにしか心を用いない。外的な束縛をのりこえと、もう相手の女性には何の障害もないのである」<sup>(p.176)</sup> がそれに反して「フランスでは、女性は大いなる自由を享受していて、羞らいと、良俗で見張られているだけなので、愛の圧力に、義務を対抗させることを知っている」<sup>(p.176)</sup> と頌えている。フランスのこの誇りは、Charles の小説にも見られるから、広く言われていた意見だと推量される。更に、女性が男性に従属すること自身、自然の理に叶ったものだとは見ていず、ただの力の結果だとしている。「男性達は、女性に対する権威を、自然の権利よりむしろ力でうばい取ったのだ。女性達は、美と徳でしか支配することが出来ない。この二つの力を併わせることが出来れば、彼女達の支配はもっと絶対であろうけれど、美の支配は長くは続かない」<sup>(p.161)</sup> 同様な考えは、Montesquieu にも Fontenelle にも見られるものである。力で対抗しようとすれば、女性は男性に従属するしかなく、美で支配するには長続きしないとすると、女性が男性に劣らずその能力を発揮出来るのは、知的領域においてだけである。18世紀が進むにつれてこの考えは、M<sup>me</sup> du Châtelet などに現われてくる<sup>(11)</sup>が、M<sup>me</sup> de Lambert はまだそれほどの断言は避けながら、女性の学問を擁護してゆく。彼女が、「Montaigne 風に」<sup>(p.192)</sup>脱線しながら優雅に書きすすめたところを三段論法風にまとめてみると次のようになる。

女性が学問をすることの社会的意義を彼女はまず明らかにしている。「私達がよい読書で忙しくなることができれば、私達の中に知らず知らず確実な養分がつくられ、それが道徳の中にも流

れこむ」<sup>(p.164)</sup> というのである。この点で彼女は Molière の *Les Femmes Savantes* の上演が与えた悪影響を歎いて、女性が本を書くことが今日ではこっけいなこととされたため、女性の学問は悪徳と同じ位の恥となり、女性達は同じことならと快楽に走るようになった」<sup>(p.160-161)</sup> とまで憤って、「一体何の権利あって、あなた方は学問や美術の勉強を私達（女性）に禁ずるのです」<sup>(p.163)</sup> と云う。それどころか女性に学問をさせることは、浮薄な迷いから彼女達を救い、男性にとっても大きな利益を齎らす。「何故なら、私達が自分自身でなくなることが、すべての逸脱の源なのだから」<sup>(p.163)</sup> と説いて、よき時代の例として Rambouillet 館や, Henriette d'Angleterre をあげている。<sup>(p.164)</sup>

こうして社会的利益を論証しても、次には女性の能力に対する不信を打破しなければならない。その論点は次のようになる。「女性を攻撃する人々は、事物を考察することにある精神の働きの、女性はずっと不完全だと主張する」<sup>(p.169)</sup> その理由は彼等によると、「女性達を支配している感性が、気を散らさせ彼女達をひきずる」<sup>(p.169)</sup> からである。この意見は17世紀を通じて伝統的なものらしい。M<sup>me</sup> de Lambert はこの意見に対して真向から反対しようとしめない。その点理性の平等をかざす男女平等論者とは異った論法をえらんでいる。彼女は伝統的に確立されたこの女性の特徴を逆に知的活動肯定の利点にしようとしている。「非常に尊敬すべき或人 (Malebranche) は、女性に想像力のあらゆる美点を与えています。趣味というものが彼女等の手段である。そして彼女達は 言語の完璧さの審判者となる」<sup>(p.166)</sup> 「この利点は 並大抵のものではありません」<sup>(p.166)</sup> と M<sup>me</sup> de Lambert は結論している。彼女によると趣味は非常に高く評価されるべきもので、「それは感性と精神の結合であり…両者が通じ合って判断を形成する」<sup>(p.195)</sup> のである。そこで趣味は、「心の中の大変デリケートな感性と、精神の非常な正確さによってきまる」<sup>(p.198)</sup> しかもこの趣味の力を「与えるのは自然」<sup>(p.168)</sup> であって規則では捉えられない。「趣味は精神に繊細さを与え、理性の厄介にならずに、各事物の中で見るべきものを全部活き活きとすばやいやり方で見せてくれるのである」<sup>(p.168)</sup> 更に「感じる力は悟性を傷つけるのではなく…観念がより活き活きと、より明確に、より判然と現われるように照らすのである」<sup>(p.169)</sup>

こうして、「事物を考察することにある精神の働きの女性が女性はずっと不完全」という主張は見事に反駁されている。更にこれ程高い機能を感性に与えるなら、それを多分に賦与されているとされている女性こそ、知的創造の分野ですぐれた活動が出来ることになる。それを認めないのは偏見にすぎない。「もし或婦人達の詩が、ギリシャ・ローマ時代のものであるという価値を持っていたら、あなた方はギリシャ・ローマ人の作品に対すると同じ讃歎をもってごらんになるでしょうに。ギリシャ・ローマ人の作品には正当な評価をしておられるのに」<sup>(p.165-6)</sup>

知的創造の分野だけでなく彼女は感じる力の威力を徳性の分野にまで広げている。「感じる力なしに、あなたは人間性も高邁の心も持つことは出来ない。感じる力は精神を助け徳に役立つ」<sup>(p.170)</sup> と云って、その実例として M<sup>me</sup> de La Sablière をあげている。「彼女の趣味は常に理性によって正当化され、その友人達に尊敬されている。…この世で最も魅力ある人物」<sup>(p.170)</sup> と推奨し

ている。感性和理性の調和した人間を最高の理想とするこの考えによると、そうした完全性はむしろ女性にあるということになる。何故なら、女性が理性を併せ持つことは不可能ではないが、感性は努力して得られるものではないので、男性が感性を併せ持つことは難しいと云うのである。「女性は味方として大権威者を持っています。それは Saint-Evremond で、彼は完全性の手本を与えようとした時、それを女性の間においたのです。男性の中に女性の快よさを見出すより、女性の中に男性の理性を見出す方が可能性が多いと私は思う、と彼は云っています。」<sup>(p.170)</sup>

この両方の力が完全性を形ずくるとすると、何故女性にその開発を禁じるかという論法になる。「私は女性を代表して男性にたずねます。あなた方は私達にどうしろとおっしゃるのです。あなた方は愛すべき精神と正しい心を持った尊敬すべき人物に結ばれたいと皆ねがっておいでです。さあ、それなら女性達にその理性を完全にするものの使用を許しておやりなさい。」<sup>(p.172)</sup>

「しかし妙なことに」と彼女は現実を観察し、憤りをもって結論している。「女性達に才智をもつことをのぞみながら、それは才智をかくすためであり、それを留めておくためであり、何も創り出さないようにするためなのです。…才智のあらゆる所産物の魂であり、支えである名誉が女性達には拒まれているのです。女達は才能から、すべての対象をうばわれ、すべての希望をとり去られています。人はその才能を低めているのです。プラトンの言葉を使わせて頂くなら、人はその羽を切っているのです。彼女達にそれでもなお才能が残っているのこそ、驚くべきことです。」<sup>(p.172)</sup>

こうして彼女は、自然が女性により多くの感性を与えたとする旧来の説に対抗せず、ただ感じる能力の価値を高めることに努力し、その結果として女性の知的能力の評価を高めることに成功している。巧みな論法であると共に、この論法の背後には、理性と同じだけの評価を、感じる力に与えた17世紀の *honnête homme* の理想が大きな支援をあたえていることも見逃せない。彼女を中心とする人々が、*Nouvelles Précieuses* と呼ばれたゆえんでもあるし、また *M<sup>me</sup> de Lambert* が女性の知的活動を擁護するに際して、17世紀に残してくれたよいものを、いかに巧みに吸収し、有利に展開させたかを証明するものである。

∴

以上の三章を通じて、女性の教育、学問についての *M<sup>me</sup> de Lambert* の考え方の特徴として次のことを結論してよいと思う。

その第一は、第一章において明らかになったように、Fénelon の女子教育論をおおっている宗教的な女性劣等視と隔離への傾向から、彼女が完全に免がれていたことである。これにかわってそこには、自然に対する信頼に基礎づけられた、女性の人権への信頼が見られた。第二章においては、友情を論じた部分にも、自然が特にデリケートな感性和尊敬すべき理性を恵んだ男女の間には、古代ギリシャ・ローマ人の男性間に存在したような完全な友情があり得ると力説されており、その条件として女性にも男性と同じ価値を相手が認めることがあげられている。彼女が女性

の劣性を信じていなかったことは、ここにいたって明らかであるが、さらに第三章では、女性は感性において男性よりすぐれた能力を自然から与えられており、その上に理性を啓蒙するならば、両方の能力をかねそなえた、男性以上にすぐれた知的活動を行い得ると考えていたことが証明された。

このように、彼女の理論の全体を支えているものは、18世紀初頭にすでに現われ、Rousseauへと発展してゆく自然への信頼と感受性への高い評価である。この思想が女性に対する偏見を打ち破る上に有利に働き得る可能性は、M<sup>me</sup> de Lambert の場合によって証明された。この新しい考え方が、その後の女性論の中にどのような経路をたどったか、またどのような欠点を持っていたかは、次の研究のテーマとしたい。

(註)

- (1) 大阪外国語大学学報17号「フランス17世紀における市民階級の女性」p.3.
- (2) Snyders: *La Pédagogie en France aux XVII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles*, 1965, p.4.
- (3) Shackleton: *Montesquieu, A Critical Biography*, 1961, p.65.
- (4) 例えば、《Voicy, Madame, quelques Lettres persanes. Vous voyez que j'employe toutes sortes de moyens pour surprendre votre estime. C'est qu'il n'y a personne dans le monde à qui j'aye plus d'ambition de plaire》, Lettre de Montesquieu à M<sup>me</sup> de Lambert, écrite en 1724, citée par S. Delorme in *L'Encyclopédie et le progrès des sciences et des techniques* 1952 p.23.
- (5) Zimmermann: *La Morale laïque au commencement du XVIII<sup>e</sup> siècle, Madame de Lambert*, Revue d'Histoire littéraire de la France, 1917, p. 466.  
また F.Deloffre も彼女の影響力を評価したのち、次のように描写している。  
《Elle disposait en effet, pour exercer une influence réelle, d'avantages nombreux, son esprit, ses connaissances, son âge, l'ancienneté de son salon, ouvert depuis 1690 environ, son caractère enfin, s'il faut en croire le mot qu'on lui attribue: "J'aime beaucoup la société; tout le monde m'écoute et je n'écoute personne》(F.Deloffre: *Marivaux et le Marivaudage*, 2<sup>e</sup> édition, 1967, p.19—20).
- (6) *Oeuvres complètes de Madame La Marquise de Lambert*, 1808, p.51 以下頁数のみを本文にするす。
- (7) *Fénelon, De l'Education des Filles, Oeuvres de Fénelon*, Paris, 1823. tome 17, p.4 以下頁数のみを本文に記す。
- (8) 《on les abandonne à elles- mêmes, sans secours, sans penser qu'elles composent la moitié du monde; qu'on est uni à elles nécessairement par les alliances; qu'elles font le bonheur ou le malheur des hommes,...》*op. cit.*, p.51.
- (9) Kunstler: *La Vie quotidienne sous la Régence*, p.147.
- (10) 当時 Descartes 哲学に与えられた名。
- (11) 《quand, par hasard, il s'en trouve qu'une qui est née avec une âme assez élevée, il ne lui reste que l'étude pour la consoler de toutes les exclusions et de toutes les dépendances auxquelles elle se trouve condamnée par état》, M<sup>me</sup> de Châtelet: *Discours sur le bonheur*, p.p. Mauzi, 1961, p.21.